

動的な評論行為を導き出す学習空間への転換

黒川 孝 広

一 はじめに

国語科では評論文教材の多くを「読む」指導事項に準拠して扱われる。扱われる理由は教科書教材に掲載されているからでもあり、また入試問題として出題されているからでもある。扱われる割に、評論文教材を扱うことの価値については、統一した定義はなく、多くの研究者や実践家の主張がある。もちろん、国語科教育の法的根拠には評論文を扱う目的は見られない。「学習指導要領」の小学校に記載はなく、中学校2学年の指導事項で「説明や評論などの文章を読み、内容や表現の仕方について自分の考えを述べること。」とあり、高等学校では「古典B」で「教材には、日本漢文を含めること。また、必要に応じて近代以降の文語文や漢詩文、古典についての評論文などを用いることができること。」と教材の留意事項として書かれているのみである。いずれにせよ、目的は

書かれてない。それゆえ、国語科教育で評論文を扱うことについては、各研究者・各実践家の解釈と方法論に依拠することが多い。では、評論文教材の問題点はどこのような点にあるのであろうか。本稿では、評論文教材の取り扱いについて史的に検討し、そこから今日での方途と課題を見出すことにする。

二 綴り方としての評論文

評論そのものについては、明治初期より文献に見られるが、評論文について本格的に述べているものに一九〇九年刊行の笹川臨風の『評論文の作法』がある。同書は初等中等教育を対象としているのではなく、一般人を対象とした技法書である。同書は「作法」とあるので、読解指導ではなく、書き方指導になっている。この書で笹川は評論文について次のように定義している。

評論文と云ふのは、叙事の文でない、叙情の文でない、即ち

議論文である。我が意見を発表する文章である。(20頁)

議論文であるから、議論の対象がいて、そして、自らの主張が他者に十分に伝わるのが大切であるので「議論文の本は即ち達意である」(22頁)と述べている。笹川は説明文と意見文と評論文の異なる点は、評していることと、論じることであるとしている。それゆえ、対象に対して評するための「見識」と「観察」が必要だと述べている。

評論文を議論文とするのは笹川だけではない。内海弘蔵は『文章十講』において、「議論文は、一つに議論文といひ、また論文ともいふ。」(279頁)と述べている。議論文とあるが、対象に対して議論をする時の主張を文章にしたものであるので、話し言葉による議論をそのまま記録したものではない。それゆえ議論文というのはいささか説明が不足していると思われるが、口頭で行う議論の主張に近いものであったから、議論文としたのであろう。同書は学生の作文能力の低下を嘆いた内海が、学生向けに作文の書き方を指南したものである。内海は評論文の定義を次のように述べている。

評論文は事理を解き、道理をまかち、そしてそこに、自分の意見を立て、説を述べようといふ文章である。だからその為には、人の意見を批評し、論難して以て、理をひらき、理を推すといふことがおこつてくる。

この文章は、その性質として、読者をして、あまねく、わが議論にうなずかしめ、わが意見に服させようといふ目的をもつてゐる。(279頁)

これによれば評論文は論理、主張、批評という要素が評論文に含まれていることになる。そして、意図として「意見に服させよう」ということから、主張を読者に納得させて、感化させる目的を持たせようとしたことがうかがえる。

中学校の教科書では『中等文法作文教科書 巻3』に「議論文」が登場している。評論文は読みの教材ではなく、作文の種類として扱われたのである。

評論文は、事理を解き、道理を辨ち、或は、批評して理を闡き、或は、論議して理を推し、そこに見を立て、説を行ひ、理を運ぶに理を以てして、遂に最後の断定に達せしめ、以て、その題目に対する自己の立場を明にし、その題目に存すと見たる、自得の理を闡発して、これを世に提供すると共に、かねて、世をして、自己の見解に従服せしむる目的を有するものなり。

(103頁)

この教科書でも内海と同様に「服従せしむる目的」とあることから、自分の主張を読者に理解されるだけではなく、読者に感化させることも目的としているのである。もちろん自ら主張することも重視している。

この時代、小学校での評論文の扱いについて詳述したものはあまり見られない。時代は少し下がるが、一九二四年刊行の二橋三郎『綴方教育鑑賞から創作への指導』は評論について触れている。同書は小学校の綴方教育についてまとめたものであるが、その中に評論文の定義こそ見られないが、評論については次のように述べている。

正しい推論に拠らなくても、理智に訴へて物事の道理を説き、かうである、かうでなければならぬ、かうすべきものであると言ふやうに、是非を言ひ善悪を述べる態度を執つていくものは、先づ評論的態度と見るべきものである。(268頁)

ここでは態度の一つとして「評論的態度」を取り上げていて、評論を書かれた内容としてよりも、活動として認識している。二橋は説明と評論の違いについて、小学校段階では「説明的態度のものに稍々自己の見識や意見を書き加へさせた程度」でも評論的態度であるとしている。それは、小学校段階では「正しい推論に拠らなくても」自ら意見を主張する態度を重視したものであり、評論を活動して捉え、表現に活かす目的を持っているのである。表現として書く上での問題点について内海は『文章十講』で、

何等の自発的の感想もなくして、徒に、評論文を書くといふのは、実に無意味の極である。(292頁)

と、「自発」が必要であり、「評論文を書く」という受動的な態度について批判をしている。

朝日文彦は『綴方教授法研究の仕方』⁷⁾で、

評論文は、作者の自主的な自発的な創作発動によつて、初めて可能となるものである。故に評論文に於ては、課題指導の如きは明かに邪道である。課題によつても或程度の結果は期待されるであらうけれども、課題による評論文は画一的なものとなり、非生命的となつて、澁刺たる作者の批評が動かない。何より評論文に於ては、自由課題により、自由に素材を選択せしめ、その評論の対象の如きも児童生活内のものを採択せ

しむるがよい。(124頁)

と、「課題指導」を批判し、「自由課題」により、「自発的」な活動を促すべきであると述べている。内海にも朝日にも共通するのが、「自発」である。書くことの指導での問題点は与えられた課題ではなく、学習者自らが主体的に評論する課題を設定することである。これから一九一〇年代の評論文は主として文章表現の指導として扱われ、ある主張に対しての議論をするためのまとめた文章であると形態を規定し、自分の主張を相手に感化させるまでの目的を有する文章として定義されている。その上で、学習者が自発的に評論することを重視していた。もちろん、読み方としての指導もあつたのであろうが、文献上では、詳細な記述は見られなかつた。

三 評論文の思想性

評論文は個人の主張であり、そして「自己の見解に従服せしむる目的」を有するものであるとすると、必然的に読者は筆者の思想を読むことになり、そして感化されやすいことになる。

笹川は『評論文の作法』で、評論文を「作者の精神の権化」(2頁)と述べている。作者の精神が表現されたものであるから、理解するのは、作者の論理、つまり、作者の精神を理解することになるのである。そして、評論文は誰かの主張に対しての反論であり、あるいは既成概念に対する反論であるから、対象が存在する。朝日文彦は『綴方教授法研究の仕方』で、「評論文は、或意見を採つて之に批判を加え、更に自己の意見を樹立するものに外ならな

い。(125頁)とし、批評をした上で自説主張するものが評論文だと述べ、「相手がなければ評論文は成立しない。」(125頁)とし、「相手のない評論は即ち感想文」であるとして、対象に対しての批評がないものは評論文として成立しないことと主張している。となると、必然的に対象についての批評の視点が必要であり、それは、筆者の見方であるから、筆者の思想そのものであるとも考えられよう。『中等文法作文教科書卷三』でも、

根拠ある思想を行ふのに、独自の見識と規矩ある論法とを以てし、その最後の断定に、抜くべからず、動すべからざる權威を与ふることを期せざるべからず。(115頁)

と、「独自の見識」を重視し、書く人の個性を求めている。いわば、誰にでも言えることではなく、自分だから言えることを論ずるのであるから、読者への感化を求めるので、より思想を理解させるという行為にならざるをえないのである。

大河原忠蔵は「中学・高校の評論の教育」で評論の魅力について「筆者の知的発見との出会い」と「筆者の生き方との出会い」の二点を挙げている。

評論の魅力は筆者の知的発見の見事さと主体的に出会うことができたときに生まれる。評論の指導では、教師がこの出会いを可能にするように工夫しなければならぬ。こどもにただ文章を克明に読ませていただけではこの出会いは訪れない。(28頁)

大河原は一九一〇年代の書く場合と異なり、評論文を読む場合について述べているが、読む側から「筆者の知的発見」に「主体

的に出会う」ことは、「筆者」の思想を読むことになる。

書く時に思想が入り、それを読む時に思想を自分の中に取り入れることになるのである。となると、「正しく読む」「正確に読む」という行為は、あくまでも客観性を持つて見ることを主眼にしているとしても、実はその客観性が担保するかといえそうではない。評論を書くことは、執筆当時の筆者の考えに基づき、執筆時点までの筆者の考え方がまとまったものである。生まれてから様々な事象や媒体、人との交流から、さまざまな感情がわき起こった結果として考えに行き着いたものの見方や考え方の到着点である。もちろん、執筆された後に筆者の考え方が変わることもあるので、あくまでの執筆時点での筆者の考え方である。であるので、評論は執筆時点の筆者の人間形成が反映されているものであり、評論文は人間性が象徴的に表出されたものであると言える。その人間性の表出されたものを読み解くことは、文章として文字や語句などの形式的な表現を理解するのみでなく、必然的にその筆者の考え方、思想を理解することになるのである。それを正確に読み解くということは、筆者の思想を自分の中に再構築することであり、筆者の思想を正確に読者の中に複製することになる。場合によってはイデオロギーの伝授が開始されることになる。

つまり、評論文を正確を読み解くことは、正確であればあるほど筆者の思想を正確に自己内に複製していくことになり、それは、評論文を読み解くということからいつの間にか、筆者の思想を再構築する営みになっているのである。「教育基本法」の目標に「幅広い知識と教養を身に付け、真理を求める態度を養い、豊かな情

操と道徳心を培う」とあり、そして「個人の価値を尊重して、その能力を伸ばし、創造性を培い、自主及び自律の精神を養う」とあることから、教育活動は必然的に学習者の「教養」「態度」「道徳心」に育成が伴うのである。「学習指導要領」「現代文B」の目標でも、「ものの見方、感じ方、考え方を深め、進んで読書することによって、国語の向上を図り人生を豊かにする態度を育てる。」とあることから、人間形成の上で、考え方や態度にまで反映する教育を求めている、必然的に国語科の教材は「態度」や「考え方に影響することになる。評論文を読むことは、思想的や道徳的になるのである。

しかし、実際の教室では、そのようなことは生じる可能性は低い。それは、学習者が評論文の作者の思想を複製するまで正確な読み取りをしているとは限らないからである。本文を読む時に、自分に必要な情報を取捨選択することが多い。例えば、段落構成、例示、論法、素材などである。興味関心を持って読み取ること、評論文の中から自分にとって有益であるか、または、参考になるものであるなどの判断し、作者の思考過程についてや書かれている内容を知識として情報読み取りをするなど、学習者の読み取り姿勢に影響するからである。正確な読み取りをしないことによって、より学習者は評論文から加工された考え方や内容を自分の中に複製し、そして再度、表現の段階で加工するのである。もともと持っている考えについて、評論文の視点によって、考えを追加するのであり、作者の意見に惑わされることがないというのが現実的な構造であろう。

四 個人読解から集団で対話を通じた評論行為

これまでの評論文教材の扱いについては、個人を対象しての記述であった。しかし、ほとんどの教室では学習者が複数いて、その児童同士・生徒同士が相互に影響し合っているのが現状である。個人の評論文教材の読解指導や記述指導は、教室の空間でそれぞれの場面で行われる。集団での評論文教材の読解指導や記述指導は、集団相互の関係において行われる。具体的には、教科書などの評論文教材について、学習者が意見を話し、それを他の学習者が聞くことである。評論が既成意見や既成事象に対して論ずるのであれば、評論文教材を読んで、意見を述べること自体が評論の行為になっている。評論が立場によって異なるのであれば、学習者がそれぞれ教科書などのあらかじめ準備された教材に対して、それぞれの意見を述べ、その意見を聞くことによって、新たな評論教材が生成され、それをまた対象として読解することになるのである。もちろん、量的に見れば教科書教材よりもはるかに短いものであり、根拠も十分に用意されるとは限らない。しかし、質的には学習者の評論行為である。その時に、教師はファシリテーターとしてそれぞれの生徒の評論行為を支援する。学習者がそれぞれの立場で意見を述べ、その根拠や視点について理解し、他者と自分との差を認識する。その上で自分の論点や筆者の論点、他の学習者の論点などを比較することで、評論行為へと導くことが出来るのである。

それらの学習過程を経て、学習者が自ら考えている自発的な思

考を文章にすることで、評論行為は文字として定着することが出来る。教師はその間、生徒の指導に当たるが、一人一人を指導する形態から、多人数がお互いに影響し合う形態に、いわば、コーチングからファシリテーションとして学習者と教師との関係を見直すことが、評論行為を指導する上では必要な観点であろう。

五 口頭評論行為と教材

教材の観点から見ると、評論教材は授業前から準備されていた、あらかじめ印刷され、予定されている教材のみを指すのではない。授業中に学習者が評論行為として表現した意見を、対象として教材化することがある。授業中に生成された教材である。これらを二つに分けて考えると、次のようになる。

静的教材 (static text) 教科書など事前に準備された教材

動的教材 (dynamic text) 授業中に学習者が生成した教材

このうち、学習者が生成した動的教材は、学習者による評論行為の成果である。評論行為という言語活動を通して、学習者同士が評論を開示し、教科書教材の評論文と交互に理解・思考・表現を繰り返していくことで、教室という空間で言語活動が多角的に行われ、学習していくことになるのである。

集団相互の関係の場合、生徒が話す、書く評論は、短い者が多くなるであろう。筆者の評論から具体例を拾象し、論点を抽出するからである。教科書の指導書にはほとんど評論文の要旨が四百字程度でまとめられている。このリایتされた要旨は、評論の簡便な理解としては役に立つことがあり、学習者が本文の趣旨を

理解するのに、要旨を扱うことは効果的であろう。となると、短文の評論を扱うことも視野にいれるべきである。

村田露月の『小品時文応用文例』¹⁾は文章作成の Handbook として扱われた文例集である。その中に「評論文」が八十編掲載されている。いずれも短文である。例えば次の通りである。

不言不動の勢力と云ふのも潜勢力と云ふのもつまり同じ事である。以心伝心など、云ふと何たか六ヶ数様であるが矢張り其別名に過ぎない。が然し解し易く又解し難いのが此不言実行の勢力と云ふ奴であるまいか。(八二頁)

このような短い評論文を読み取ることで、論の展開を把握し、自分から表現する機会を多く持てるようにすることができよう。特に日常的な話題を扱うことで、主体的な書く行為につながるのであり、評論行為を体験しやすくなると思われる。

六 動的な評論行為

以上を踏まえると、評論文を読み進めるといふ読解の行為のみにこだわることなく、主体的な評論行為をすることをへて、学習活動を主体的に豊かにすることで、評論文教材を扱うことの価値が高まると思われる。

具体的な方途として、次の点が考えられる。

- ①身近な話題について、自発的に対象を口頭で評論することで、評論について馴れ、「書く」ことへつながる指導をする。
- ②教室内で評論活動が主体的にできるように、動的な評論行為を扱うため、教師のファシリテーション能力を高める。

③短い文章の評論を読み、そして、短い文章の評論を書くなど、評論文についての抵抗感を無くしてから長文に取り組む。

これ以外にも例示の検証や例示の発掘など、様々な観点からアプローチがある。「書く」「話す」表現行為を重点的に扱い、学習者一人一人に興味を持った資料を扱い、学習者が主体的に調査・批判して意見を述べるようにすること、そこに評論教材を扱う価値がある。集団の中で話し合いなどから、より生徒の自発的活動を促す教材として、教室を学習者の動的な評論行為を導き出す学習空間と捉え、論理力育成のために読解する評論文教材から、主体的な学習のための評論教材へと教材価値観を変えていくことが、今日的な評論文教材を扱うことの課題であろう。

注

- 1 文部科学省『中学校学習指導要領』(二〇〇八年三月、文部科学省)「2内容」
「C読むこと」「読むこと」の能力を育成するため 11頁
- 2 文部科学省『高等学校学習指導要領』(二〇〇九年三月、文部科学省)「古典B」
「3内容の取扱い」(17頁)
- 3 笹川臨風『評論文の作法』(一九〇九年(明治四二)年、勉強堂)
- 4 内海弘蔵『文章十講』(一九一〇(明治四三)年、文成社)
- 5 服部躬治内海弘蔵『中等文法作文教科書巻二』(一九〇八年(明治四二)年、明治書院)
- 6 二橋三郎『綴方教育鑑賞から創作への指導』(一九二四年(大正一三)年、東雲堂)
- 7 朝日文彦『綴方教授法研究の仕方』(一九三二(昭和六)年、高踏社)
- 8 読みとして評論を意識したものとして、例えば佐藤末吉『生活学習小国語読本の指導 尋常科用巻十一』(一九三九年(昭和十四)年、明治図書)が

ある。その中では、次の教材が評論文教材であるとし、「巻十一の評論文は豊富である」と述べている。(52頁)

第四「源氏物語」源氏物語の地位についての評論を主体とし。

第五「法隆寺」建築について美的批評を加えている。

第十二「古事記の話」国民精神についての議論が大きな要件をなしている第十三「松阪の一夜」古語と古代精神についての議論が中心になつている。

第二十六「鉄眼の一切経」

第二十八「日本刀」日本刀についての評論をなす。

注7に同じ。

10 大河原忠蔵「中学・高校の評論の教育」講座 現代の文学教育 第五巻

(一九八四年(昭和五九)年五月、新光閣書店)

11 村田露月『小品時文応用文例』(一九〇六年(明治三九)年、文陽堂)

(吉祥女子中学・高等学校／早稲田大学非常勤講師)